
王様に召喚されました

くいな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王様に召喚されました

【Zコード】

Z8973W

【作者名】

くいな

【あらすじ】

突如一国の王に召喚されたと思ったら黒猫で王様は美形で擧句の果てに運命の人などと言われたのですが、これは夢ですよね？ そうだよね？ 誰か返事して！ そして私を起こしてええええええーーー！ ギヤグシリアスラブコメディーな物語。

（作者は初心者です。誤字、文章などあるですが、よろしくお願いします）

召喚される

運命を信じていないと言つたら嘘になる。

告白されることは多々あつたが、全部断つてきた。

何故かこの人ではないと本能が告げ続けているから…。

好みの男性が現れないのも運命の人じやないからと言い訳してきた。

それは突然起こつた。

「…にや？」

え！？

にやつて何！？

私の名前は四之宮凜。今しがたベットに入り、就寝しようとしていたはずだ。

だが、突如私の下に変な魔方陣みたいな光の線が現れ、今私はどういう訳か大勢の巨人に囲まれている。

「さすがウィルフレッド様！異界から運命人うんめいびとを召喚するなんて！」

綺麗な女人に絶賛された男の巨人は、西洋貴族のような格好をしており、黒い髪に青い目で、今まで診てきた男のなかで一番の美形であった。

何が起きているのだろうか？

ここはどこだらうか？

そもそもここは現実なのだろうか？

「[ニ]やつ…？」

そういうえば猫みたいな声しかでない。よくよく見てみると手は黒い毛で覆われている。そして極めつけは視界の端に[ニ]る黒く長い尻尾。もしかして…。

「[ニ]やああああ…？」

『猫になつちやつたああああ…』

四足立ち上がり、その場をぐるぐる回つてなんとか自分の姿を確認しようとするが、やはり黒い尻尾と黒い背中が見える。

ぴかぴかの床を見ればそこに[ニ]るのは黒猫。それ以外に自分の姿が見つかるはずもなく、果然と床を見つめる。それは紛れもなく今の自分の姿。

その時、扉が開き、男が息を切らしながら入ってきた。

そのまま美形西洋貴族のもとまで走り寄り、耳打ちする。

「…そいつを部屋に通して色々説明しつけ」

そう言って、美形西洋貴族は立ち去った。

後に残つた大勢の巨人（これは私が猫で目線が低いから巨人に見えるだけで、普通の人のサイズなのだが…）の一人が私に歩み寄り、目線を合わせてくる。

混乱している頭に、現状が掴みきれず、全てに恐怖を感じる。自分でも体が震えているのがわかる。立っているだけで精一杯だ。

「怖がらないでください。大丈夫です。あなたに危害は加えません。はじめまして、私はアーラー・ナ・デイシルと申します。これからウイルフレッド様の運命人様の身の回りのお世話をさせていただく者でございます。よろしくおねがいします」

そつ言つて、そつと私を抱えて今までいた部屋を出た。

夢だよね?
夢だと言つて?
ていうか夢しか考えられないでしょ。
といふか誰か早く私を起こしてえええええ！――！

召喚される（後書き）

短
つ
！
？

不安と強引な優しさ

連れてこられた部屋の内装はとても豪華で、本当に西洋貴族の家ではないかと思った。

「お名前をお聞かせ願いたいのですが…。生憎私では猫の言葉を理解することはできませんので、お名前がわかるまで姫様と呼ばせていただきます」

そう言つてニーニューロリ笑うアラーナ。

「まず、姫様がこの世界にやつてきた経緯とこの世界のことを説明いたします」

混乱する私を置いてどんどん話が進んでいく。
ああ、夢なら早く覚めてくれ。

「姫様はこのフォンテーン王国の王、ウィルフレッド・シルビス・フォンテーン様の運命の人としてウィルフレッド様に召喚されたのです」

アラーナが言つには、この世界は20歳になると運命人と呼ばれる運命の人を召喚し、結婚するのだそうだ。運命人は、同じ世界の人が多いのだが、稀に異界から召喚されることがあるらしい。私も異界から召喚された人の一人らしい。

それにしても…、西洋貴族みたいとは思つたが、まさか王様とは…。

「使用した魔方陣には言語の共有と運命人との魔力の共有、そして

異界から召喚されてまだ体が世界に馴染んでない運命人のために馴染みやすい体に変換させる術が組み込まれているのです。姫様は異界からの召喚で体がこの世界に馴染んでいらっしゃらないので、体に負担が掛かりにくい動物に体が変換されているのです」

動物は、人間の姿より体力を使わず、尚且つ馴染むのが早い。そういうモノなのだそうだ。

それからもこの世界について教え込まれた。

例えば、この世界では瞳の色が女は金色、男は水色に変わるそうだ。髪の色赤だったり、青だったり、白だったり様々だが、これだけは共通らしい。

そして、この世界には魔術と言つものがあるらしい。持つている魔力によつて多少寿命が変わるらしい。

ちなみにこの世界にいる人、召喚された人も含めて平均寿命は5000年から10000年という長寿すぎる長寿。容姿は20代から老けることはないらしく、まさに都合のいい世界である。

美形西洋貴族はウイルフレッシュドといつらしく、この国の王なのだろう。若くして即位し、歴代のどの王よりも優秀と言われているらしい。

そんな凄い人に運命の人とされて召喚された私。それは必然的に、王様に嫁ぐことを表している。

「お母さん、夢じゃなかつたら私王様のお嫁さんだよ…。

日の沈みかけた頃、アラーナは疲れているだろうと一人にしてくれた。窓辺の椅子に飛び乗り、外を眺める。

城はとても広く、とても高い。自分が猫だと言つことを除いても、本当にでかいのはわかる。

『きれい…』

外はひたすら城下町が広がっており、灯り始めた街灯と家の明かりが何とも言えない景色を作り出している。

相変わらず猫の鳴き声しかでないが、我慢するしかない。聞けば元の姿に戻るのは最低でも二ヶ月かかるらしい。

帰ることは無。一度来たら一生ここで過ごすしかないと言われた。

必死で涙を堪える。

町を眺め、もう会うことの無い家族を思い浮かべた。

どれくらいそうしていたのだろうか、いつの間にか日はすっかり沈んでしまい、夜特有の肌寒さが体温を奪っていく。

「寝ないのか？」

いきなり声が後ろから聞こえてきて、びくっと体が跳ねた。

後ろに振り返つて見えたのは、黒髪に碧眼で超絶美形。 ウィルフレッドであった。

思い耽りすぎて、彼が部屋に入ってきたのに気づかなかつたりじ。

「風邪をひくだ」

そう言つて窓を閉められる。

ウィルフレッドはそのまま机に向き、しゃがんで私と田線を合わせる。

「泣いて……いるのか……？」

勢い良く振り返つた拍子に涙がこぼれたようだ。

『あ、あれ？』

こぼれたことに気づかなかつた。前足で急いで自分の涙を拭う。

『つわあ！？』

いきなり脇の下に手を挿し込まれ、浮遊感に襲われたと思つたら、いつの間にかウィルフレッドとベッドに寝転んでいた。

「お前、名は…？」

ウィルフレッドが私の田元のこぼれそうな涙を拭う。

そつこえぱな乗つてなかつた。

私は猫の言葉しかしゃべれないから無理だと思つたが、アラーナが運命の人には通じると言つていていたのを思い出す。

『因え富凜…です』

「…ワイルフレッシュ。ワイルでいー」

そう言つて、私の体を撫で始める。

その手のひらの温もりが気持ちよくて、だんだん眠気が襲つてくる。

「寝ていい

寝ていいと言われると、もう意識にしがみつく理性は無くなる。私は意識を闇に落とした。

起きたときには自分の部屋の天井が見えることを祈つて…。

朝起きるといつては美しい

わー、これどうこう状況？

夢であつてほしいという願望は見事に打ち砕かれ、現在私は美形で視界をいつぱいにしております。体は美形に抱き枕の「」とく抱きかかえられ、身動きがとれない。

『ビックリ…』

相変わらずしゃーしか言わない自分。普通にしゃべれるようになるまで最低二ヶ月。

『はあ…』

思わずため息が出る。

とりあえず、この状況から脱しないと死ぬ。恥ずかしきで。

起いやないように身を捩つたりもがいたりしたが、ウィルフレッドの腕はびくともしない。

『つ、疲れた』

朝から何故こんなにも疲れなくてはいけないのだろうか。

起きようと猫パンチを食らわすが、起きる気配がない。

仕方が無いのでウィルフレッドを見つめてみる。

『まつげ長っ！本当に美形だなあ』

そういうば案外優しかったなあ……。と昨日のことを思い出す。
最初は無口で怖い人だと思っていたが、やうでもなく、涙の止まらない私を優しく撫でて添い寝してくれた。

そこひまで思い出して顔を熱くする。

『恥ずかしい……』

なでなでされて抱き枕にされながら一緒に寝るなど……。

「ん……」

ウィルフレッドの呻きにびくっと体が跳ねる。

開ざされていたウィルフレッドのまぶたが開かれ、宝石のような碧眼が現れる。

「起きたのか……」

そう言つて、私の頬に手を滑らせる。

私の心臓はバクバク言つてゐる。

何ですかこの無駄な色氣は！？死ねと言つてるんですか？そつなん

ですか？そつなんですね！？

そこに、ナイスなタイミングでアーラー那がノックをして入ってきた。

私は今の状況に耐え切れず、体を先ほど以上にじたばた動かし、ウイルフレッドの腕から抜け出す。そのままドアに向い走り、部屋を飛び出した。

後ろでアーラー那の声が聞こえるが、今の私はそれどころじゃない。私はとにかく走った。

『はあはあ、死ぬ』

着いた場所は庭らしき場所。色々な花が咲き、風に揺られている。

「あれ？ 黒猫。どうかから迷い込んできたのかな？」

声が聞こえたと思つたらいきなり持ち上げられて、声の主と田線を合わせられる。

『わー』

これまた美形である。金髪を風に靡かせて、ウイルフレッドと良く似た青い瞳で私の顔を覗き込んでくる。

「あ、黒猫つて…。もしかして君ウイルの運命人じゃない？」

彼の友達だろうか？ ウィルフレッドのことをウィルと呼ぶ人に出会ったのは初めてだ。

「にー やー

「やつぱりそうか。俺はウルフガング・シーザ・フォンテーン。ウィルの従兄弟なんだ。ウルフでいいよ」

そつ言われてみれば、何となくウィルフレッドと似ている。

「…ウルフ」

いきなり後ろから聞こえてきた声は、ウィルフレッドの声。

「あ、ウィル。おはよ。今ねウィルの運命人を捕まえたんだ。ねえねえ、紹介してよ」

そつ言ひて、私をウィルフレッドに渡す。

「…………」このつの名前はリン。捕まえてくれたことに感謝する。あとで褒美にカーライル産のランティパイを部屋に送る

ウィルはそのまま踵をかえし、建物の中に足を向ける。

「マジ！ ？ カーライルのランティパイつまいんまだよなあ…じゃなくて…え？ ちょっとそれだけ！ ？ あ、ちょっと、まつ、ウィル！」

呼び止めるウルフに田もくれず、黙々と歩くウィルフレッド。どうかしら怒っているように見えなくも無い。

『あ、あの… ウィルフレッド… やん?』

「ウィルだ」

声のトーンが低い。間違いなく怒っている。

『ウイ、 ウィル、 あの… 『めん… なさい?』』

恐る恐る謝つてみるが、 ウィルは私を抱えたまま無言で部屋まで歩
き、 部屋に入った途端私をベットに放り投げた。

お母さん、 早くも廻操の危機を感じます。

捕食者との甘い一時

わーわーわー！

ビーハンヒーハンヒーハンヒーハンヒーハンヒーハン

「リン、何故逃げる」

部屋には既にアラーナの姿はない。

ベットに放り投げられた私は、猫の本能で見事にベットに着地。急いで逃げようと足を浮かせる。

だが、すぐさま私の上に乗ったウイルの腕に行動を阻まれる。ウイルとの距離わずか2センチ。

「勝手に外を出歩くな。お前は仮にも王に嫁いだ身。いつどこの誰に襲われるかわからない」

今ここであなたに襲われそうです。

ウイルがしゃべるたびに、耳に吐息がかかつてぴくぴく耳が動いているのがわかる。

『「」、「めぐなさ」』

猫である私は、着地したときに必然的に仰向けのよつた状態になり、真上に乗っているウイルの状態がわからないが、声のトーンの低さや、地味に強くなっていく腕の強さに本気で怒っているのがわかる。

だから怖い。めちゃくちゃ怖い。

ブルブルと体が震える。

『ほ、本当に「めんなさーつー」』

体も尻尾も丸まっている。

「…フシ」

不意に上から笑いが聞こえたよつた気がしたと思ったら、頭にちゅつとキスされて影が無くなる。

「飯にするだ」

何事も無かつたかのようベットから降りるウイル。

『ウイル…?』

恐る恐る身を起こしてウイルを見る。

「あまり部屋から出るな。出るときは必ず俺かアラーナかウルフに付き添いを頼むこと。それが条件だ」

いつの間にかテーブルの上に用意されている朝食にお腹が鳴る。

ウイルの傍まで行くと当たり前のように抱き上げられ、ウイルの膝に乗せられる。

『えつー・つー、ウイル！？』

「お前はペチートじゃないんだ。床で食べやむわけにもいかない。テーブルの上に乗るのは行儀が悪いだろ？」

そうですね、でもどうやってウイルの膝の上で『飯を食べろ』と言つのですか。

ウイルは、置いてあつたパンを一口サイズより少し小さめのサイズに千切り、私の皿の前に持つてくる。

これは俗に言つて一んといつやつですか……？

「どうした？ 食べる。毒など入つていない」

いや、そういうことではないのですが……。

未だに皿の前に突きつけられるパンと、無言の威圧が押し掛かり、渋々パンを口にすむ。

『お、おいしい……』

そう言つと、ウイルの空氣がやわらかくなつたような気がした。

その後、ウイルの膝の上でウイルがあーんされながら朝食を無事に全て食べきつた。

ウイルも朝食を食べ終わつたと同時にソファーに連れて行かれ、ウイルに毛並みを確かめるように撫でられながらウイルの膝の上で硬

直している私に、ウィルは衝撃的な言葉を放つた。

「リン、」の後は俺の親族に挨拶することになつていい

『親族…?』

「俺の両親と妹、叔父、叔母、従兄弟、甥、姪、祖父母、曾祖父母」
わー、大家族なんですねー。

超長寿だから曾祖父母がいることに驚きはしませんよ。むしろ曾曾
曾曾祖父母がいたって驚きませんよ。

といふか私何か挨拶しないとダメですよね?
でも猫だから伝わりませんよね?

それを理由に挨拶しなかつたら無礼にあたりますよね?

それにウィルのお父様とお母様って言つたらもちろん美形でしょ?
従兄弟のウルフだって美形だつたし。

美形×たくさんつて…。

どうしよう、自分が惨めに見える…。

絶対自分が霞んで見えるでしょ?

どこにいるかわからないくらい霞むでしょ。

「ウィルフレッド様、リン様、皆様がお集まりになりました」

アラーナが入ってきてそう告げる。

「わかった

ウィルは私を抱き上げ、部屋を出た。

それと同時に私は大パニック。

ウィルの膝の上で硬直していた体は、益々硬直し、まるで石のようだ。

その上、心は想像した美形フォンテーン一家によつて崩壊寸前。

お母さん、私をもつ一度美形に生みなおしてください。

捕食者との甘い一時（後書き）

そしてリンちゃんはこれから「飯をウイル様の膝の上で食べぬ」と
になるのです。

無口イケメンとほんわか美女

イジメだ。

これは新手のイジメだ。

入った部屋には美形一家が座っていた。

部屋がとてもなく豪華できれいなのに、部屋を負かす美しさ。

「一番左から曾祖父のウイルスおじい様、曾祖母のシェリルおばあさま」

曾祖父のウィリスはプラチナブロンドの長い髪をゆるく結んでいて、どう見ても美形20代。

奥さんのショリルも燃えるような赤毛がゆるくカーブを描いている超美人さん。

「その横が祖父のウォルトおじい様と祖母のエノーラ叔母おばあ様」

わあ、こっちも素晴らしいよ。

エノーラはシルバーの髪を短くし、宝塚顔負けのかっこよさ。対して、ウォルトは青い髪を適度に伸ばした無表情のイケメン。

「さやー、ウイリアム！見て見てっ、かわいー！」

突然抱ついたリンは、何が起つたのかわからず固まる。

「サラ、リンがビックリしている。放してやれ」

不満を言いながら私を放した女性はウィルと同じ黒髪で、ちょうどいい長さの髪をポニー・テールに結んでいる。
無表情ながらリンを救出してくれた男の人はなんとウィルそっくり。
ただ違うのは、ウォルトから受け継いだであろう青い髪。

「はじめまして、私はサラ。ウイリアムの妻でウィル君の母親です。
早くリンちゃんの本当の姿がみたいなあ」

「サラ、戻るぞ」

ウイリアムがそう言つと、サラは渋々ウイリアムと真ん中の椅子に戻つていぐ。

ウィルはそれを見て小さなため息を吐いたあと、再び紹介に戻る。

「父上の隣が父上の妹君のラティーシャ叔母様。その隣がイリス伯父様。そして従兄弟のウルフガング」

ウルフは紹介されると同時に手を振つてくる。

「それから、双子の妹ルシアと一つ下のルイーザとその夫のシリアルに甥のウイーザと姪のリー・チヒ」

『双子つー?』

ルイーザはウォルト、ウイリアムから受け継いだであるつ青い髪を横に流して括り、どこかふんわりとしたオーラを放つており、オレンジっぽい髪をしたシリアルと仲睦まじく座つており、まだその腕に抱かれてぐずつている産まれたてであるつ息子と娘をみて微笑んでいる。

一方ルシアを見やると、シルバーの髪を後ろで一つにまとめ、興味なさそうにそつまを見ている。

「ねえねえ、もういいでしょ？ 私リンちゃんをお話したいなあ

「…………リンがいいのなら……」

『私は別に……』

その美しさに心は崩壊しそうだけ……。

「シェリルちゃんとエノーラ姉さんとカティにルウちゃんとルイちゃんも一緒にお茶しながらどうづか……」

サラさん大物だ……。

仮にも祖父のシェリルさんをちゃんと付けしてエノーラさんを姉さんと呼ぶなんて……。

「私は部屋に戻るわ」

ルシアは立ち上がり、部屋を出て行ってしまった。

『あ……』

「えー、せっかくルゥちゃんともお話をしようと思ったのに…」

結局、ルシア以外の女性陣でお茶会をすることになった。

現在リンはサラの膝の上。

「それで、ウイリアムつたら独占欲が強くてドの付けてもつー。」

「あら、ウィルスも4000年一緒にいるのにまだ私が他の男性と一緒にいるのが許せないみたいで…」

「ウォルトはああ見えて色々凄くてな…」

「まあ、フォンテーンの男性は皆狼なのですね。イリスはああ見えて初心なのです。ウルフはフォンテーンの血を色濃く受け継いだのですね」

「シリアルはいつも優しいです。シリアルの運命人でよかつたって思っています。皆さんのお話を聞いていると独占欲が強すぎるのも考えようですねえ」

何ですかこの惚気。

ただでさえ美女に囲まれて存在が露んでいるところに、惚気のピクオーラのおかげでもう見えません。イジメです。無意識のイジメですこれは。

「ウイルフレッドもフォンテーンの血を色濃く受け継いでいるからな。ウイリアムに性格もよく似ているようだから、今頃我らに嫉妬してどうなウイルフレッドが降臨しそうだな」

エーラー！ さあ、 さう言つことを紅茶を飲みながらせりと語つせん
じやありません。 悪寒がします。

「リンちゃんもこれから苦労するわよ。特に本来の姿に戻つてから。
フォンテーンの男は基本無表情で無口だから、思つたことは行動で
表すのよ。それが何と迷惑なことか…。」

まだ2日も過ぎていないのに、もう既にその兆候が見て取れるので
すが…。

「まあ、 嫉妬しているのはウイルフレッドだけではないでしょ
うか
」「安心を」

それって皆さんも危ないってことですよね？

「まあウイル君は私の血が少し入つてゐるからウォル君たちよりはし
ゃべると思うわ」

「あ、 嘲をすれば

ルイーザの田線の先には無表情のイケメン4人。こいつってみると、
ウィルスからウイルフレッドまでの顔の変化の仮定が田に見える。
ウィルスから、だんだん顔がウイルフレッドになつていくのだ。

「やうそろお開きだ」

ウィルスがシェリルを横抱きにし、お持ち帰りしていった。

それから日々、各田那のもとこもじる。

リンも例外ではない。

若干ビコロではない不機嫌なウィルに、部屋まで抱っこされて連行されるのであった。

あれ？ デジャブ？

無口イケメンとほんわか美女（後書き）

ウイル様の独占欲は遺伝だったのです
リンちゃんはまた襲われる予感…

遺伝された独占欲

本日一度田の貞操危機を伴つベッシィウェイーンです。

『うい、 ウィル』

これまた先ほどと同じ体制の私たち。

ウィルの唇が、 毛並みをなぞる。

『あ、 あの……』

「リン……。お前が他人と話しているのを見ると腹が煮えくり返りそうだ」

あの、 相手は女性であなたの親族の方ですが？
しかも少しあ茶会をしただけではありませんか。

「お前の変身術を今すぐ解いて……」

そこでウィルは押し黙る。

その先の言葉は聞かないでおこう。

『ウィル……、 あの……』

そろそろ開放してくれませんかね?といつ意思をこめる。

開放どころか抱きしめられ、現在今朝と同じ状況。

「 もう少し、このまま…」

かすれた声で言われ、心臓が爆発寸前。

誰か助けてください! ！

もう少しでいいのにしてくるのだね? つか?

しかし、余話もなく流れる時が嫌ではない。

だが、ドキドキしそうで眠気すらやつてこない。

ダラダラしてると、いきなりウィルが起き上がり、部屋の机に向つた。

『… ウィル?』

ウィルが手にしたものは“首輪”。

『え、つー?』

あれ？何故か体が動かないぞ？

「動かないように魔法をかけた。逃げると強いてな」

魔法つて…。

そういえばアーラーナも魔力云々言つてたよつな気がする…。

『い、いや、だつて…。』

ウイルはとつとつコンの前まで来てしまい、手に持つ首輪をコンの首に付けた。

「これで俺の物だ」

「コンちやあああああん……。」

首輪を付けたことに満足したドウのウイルから開放されたので、アーラーナに中庭に連れて行つてもらおうとしたら、アーラーナ越しに衝撃が声と共にやってきた。

「こんな」とずるのはナラさんしかいない。

「？あれ？この首輪…。…そういうとか。ウイル君まだちゃんとウイリアムの血を引き継いでいるのね」

え、ウイリアムさんも首輪を！？

サラはリンの瞬く目から意図を読み取ったよつで、苦笑する。

「私も異世界から来たのよ。我最初は小型犬で、お転婆な上に城が広くてショッちゅう迷子だったから、居場所がわかる魔法をかけた首輪を付けさせられたわ」

サラさん異世界から来たんですか。仲間ですね。
その前に、我一応大人しいと思つのですが…。

「リン様は広い心と無防備持つておいでです。きっとウイル様が心配されたのでしょ？」

え、アーナ今さらつと傷つくよつな言葉を言つませんでした！？
私無防備じやないヨ。

アーナが言つこま、この首輪は付けている者の危険をいち早く伝えることができるらしい。

「我もなんど首輪に助けられたことか…。穴に落ち、溝に落ち、池に落ち、迷子になり、連れ去られそうになつたり…。まあ、その度にウイリアムが颯爽と駆けつけて来てくれたんだけど。」

サラさんの周りにハートが飛んでいる幻覚が見えます。

「あ、そうだ。本来の姿に戻ると新しいのもりえるから楽しみにしてね」

……楽しみになんてできません。

自分で凄いこと想像しちゃってチキン肌です。

お母さん、ウイルがそっちのひだつたらどうじょ。

遺伝された独立欲（後書き）

遺伝バンザーイ！
ドンバンザーイ！

初めての喪失感

朝起きると隣にいるはずのウィルがいなかつた。

『ん…』

朝の口差しに意識を浮上させる。

「おはようございます、リン様」

挨拶をしたのはアーラーナ。

ふと、隣に温もりを感じないことに違和感を感じた。

「ウィルフレッド様は、先ほどお仕事のほうに向われました」

アーラーナは朝食の支度を始めた。

ウィルだつて王である。

運命人のリンのために休暇をとっていたのだ。
本来なら、ならば多忙なはずだ。

『しつかし暇だなあ』

くわっとあぐびをしてふかふかのクッショニに顔を埋める。

最初少し部屋に放置されはしたが、それからはずつと付きつき切りだつたのだ。

『なんか…』

自分の半分が無くなつたかのような喪失感。

今まで傍にいるだけでドキドキだつた。

それが災いしたのか、広い部屋に一人のせいか、シーンとした空気に物足りなさを感じる。

こんな気持ち初めてだ。

アラーナも屋敷の手伝いに行つていていない。
完全に暇を持て余していた。

その時、部屋のドアがノックされた。

「やつほ。元氣してる?」

やつてきたのはウルフだった。

「ウイルがいなくて寂しい思いをしてるんじゃないかなって思つてね。
そしたら案の定暇を持て余してるみたいで。あ、これ食べよつよ」

ウルフは手に持つていたパイをテーブルに置いた。

「カーライル産のランティパイ。すごくおいしいんだ」

そう言つと、ウルフはテーブルの上に紅茶のセットを転送した。

「あ、首輪つけられちゃったんだね。さすがウイル。それね、王族に嫁いだ異世界から来た何も知らない運命人を護るために作られたんだよ」

そう言つて、ウルフはパイを小さくしてリンの口に運ぶ。

リンは大人しくそれを口に入れる。

「フォンテーンの男は大体付けるね。それだけ運命人が大事だから。……いいなあ、俺あともう少ししだけど待ちきれないや」

ウルフはあともう少しで20になるらしい。

「しつかしウイルがあんなになるなんてね。初めて仕事に行くのはつたらしいよ。今まで仕事馬鹿だったのに」

ウルフは楽しそうに言つ。

「やっぱり大切なんだね、リンちゃんが」

トクンと心臓が高鳴つた。

「リンちゃんもウイルと離れてみて感じてるんじゃない？喪失感とか。父さんが言つには、体半分が無くなつたみたいな感覚だつて言つてたけど」

ウルフに言われた通り、ウイルがいない喪失感をずっと感じている。ウルフには失礼だが、ウルフがウイルに変わってくれればいいのにと思つてしまつまうほどであった。

顔に出ていたのだろうか、ウルフが苦笑して言つた。

「そんなに寂しいならウイルのところ行く？きっと朝からずっと根気詰めて頑張つてると想つんだ。ちょっと休憩をせがてら行こうよ。パイ持つて」

そう言つて、パイを右手に、リンを左手に持ち、部屋を後にした。

それはまるで全てを失つてしまつたかのような辛い気持ち。

仕事姿に見とれて嫉妬されてキスされ

「リンちゃん、ちょっとここに入つて」

そう言われて、入れられた場所はウルフの上着の下。ウルフが支えてくれているが、ちゃんと頭が出るよつに前足をかける。

着いた部屋は本がずらりと並んだ大きい部屋だった。

『図書館かつ！？』

突っ込んだリンを、田をこれでもかつ！と開いたウイルが見る。

「リン！？」

がたつと立ち上がったウイル。

その隣に立っていた執事らしき人も驚いている。

ウイルは、まるで王子様が着るような白い制服に身を包み、仕事特有の硬い雰囲気を出していた。

か、かつこいい！

数時間離れていただけなのに、会えて満たされいく心を感じる。

「やつほー。頑張ってるウイルにこ褒美持つてきたよー。」

ウルフはリンを上着から出し、近くにあつたソファーに座らせ、ソ

ファーの前の机にランティーパイを置いた。

「何のつもりだ、ウルフ」

わーわーー！ ウィルめっちゃ怒ってる！

「もう怒らないでよウィル。仕事しつぱなしで疲れてると思つて癒しを持ってきたんだ」

そう言つて、ウルフはパイを口に運ぶ。

「…まだやることが残つている。気が散る、リンを連れて部屋に戻れ」

そつけなく言われた言葉に、リンの耳が垂れ下がる。

「そんな言い方しなくてもいいじゃん。いいもん、見せ付けてやろうぜ！」 リンちゃん。ほらあーん

リンの頭をなでなでし、パイを小ちくしてリンにあーんする。

ダンッ！

『うわつー。』

いきなり大きな音がして、びくっと体が跳ねた。

「シルフ、ウルフを追い出せ。それが終わったら、後は俺一人でやる。帰つていー」

地の底から出でいるような声でウイルが言つ。

「はい」

シルフはウルフに「失礼します」と言つて坦いだ。

「うわっ！？ちよつー・シルフー・ああつー・ランティパイがつーーー！」

ウルフが連れ去られていいくのをぽかーんと見ていると、隣が沈んだ。ウイルがソファーに腰掛けたのだ。

「リン」

呼ばれて振り返る。

『むぐつー』

それと同時にパイを突っ込まれた。

必死にもぐもぐしてると、抱きかかえられ、ウイルの膝の上に乗せられた。

「お前は無防備すぎる…」

ウイルはため息を吐き、机の上に紅茶を出した。

ウイルが入れてくれた紅茶は冷めていて、猫舌なリンにも飲みやすい。

なめるように紅茶を飲んでいると、突然ウイルと向き合わされる。

「紅茶…、付いている」

ペロリと口をなめられる。

『え、ええええええええええええ…！…！』

にやああああああー！…と皿分の声がうるさいが、それどころではない。

キスされたのだ。

動物ではキスだが、人間でこれをしたら唇をなめるのと同じ。

ウイルは満足そうな顔をしている。

「ウルフにしたらいい仕事をしたな…。だが、ウルフは痛い目にあわないとわからないらしい…」

ウイルが危ない顔をしている。

ウルフ！逃げて！…！

内心冷や汗タラタラなリンに構わず、ウイルはリンを抱きしめる。

「…リン、次はない」

耳元で色気たっぷりの声で囁かれる。

この後、リンはウイルの機嫌が完全に直るまで好き放題されるのであった。

…ウルフのぶあかああああああああああああ！－！－！

仕事姿に見とれて嫉妬されてキスされて（後書き）

初チューですよー・全員集合ー！

ハイジー・リンググレーン（前書き）

ちょつとグロイ表現あり

ハイジー・リンググレーン

日を開けると暗闇が広がっている。

『何?』

事の発端は、中庭でのんびりをしていた時であった。

「リン様、お飲み物はいかがですか?」

今日の付き添いはアーラー^ナではなかった。

彼女はちよつと来ているお客様のお世話をしている。

「いやー

侍女の問ごうなずき、水を貰う。

ふと、頭を撫でられる。

その手から何か暖かいものを感じ、中庭に挿し込む口差しも手助けして眠りに落ちたのだ。

「お田覚めでいらっしゃりますか？」

田覚めるとそこはもう中庭ではなかつた。

話しかける女の声は、間違えなく城の侍女の声。

目隠しをされ、どこにいるかもわからなかつたが、この状況でまだ城の中にいるということは考えにくい。

「主が参ります。もう少々お待ちください」

しばらくすると靴音が聞こえ、部屋に誰か入つてくる音がした。

「やあ、こんにちは王妃。俺の名はエイジー・リングドグレン。ある団体のリーダーだ」

そう言う男の声は冷たい。

「俺達は異世界から運命人が召喚されることが許せない奴らを集めた集団さ。皆異世界から来た運命人に恨みを持っているんだ。俺もその一人。どこの世界からやってきたか知らねえが、俺の運命人は異世界の狂人に殺された」

静かに言う男の言葉には怒りが隠れていた。

「ここで、運命人を比較的何もできない動物のうちに殺しちまおうって言うのが俺達さ」

体が恐怖で震える。

必死に逃げようと体を動かそうとするが、動けない。

「逃げられねえよ。魔法かけてあんだ。最初の三ヶ月は異世界から来た運命人は安定してねえから魔法は教えられねえんだ。だから抵抗すらできねえのさ」

クククッと笑いながらリンドグレーンが近づいてくる気配がした。

「よかつたな。元の姿に戻れて。だが苦しいかもな。まだこの世界に馴染みきつてない体を本来の姿に戻してやるだけだ。知ってるか？世界に馴染まないと体が壊れてくんだよ。少し押しただけで骨がボキボキ折れてって、少しつめを立てただけで血が噴き出すんだ。呼吸だってまともにできやしねえ。そうやってだんだん苦しんで仕舞いには殺してくれつて俺の足に縋り付くんだ。優しい俺はな、殺してやるんだよ。確實に死ねるよう首吹っ飛ばしてなつ！あははははははは！」

大笑いするリンドグレーン。

そして笑いをぴたりと止め、リンに近づく。

『い、いやあー。』

「ククッ、『ヤー』『ヤー』言つてもわかんねえよ」

リンドグレーンはリンの目の前まできて、横たわってるリンに手を翳す。

すると、リンの下に魔方陣が現れ、光出す。

『…つああああああああああああー……』

途端に体が変わつていく感覚。

全てが元に戻つていぐ。

「ああああああああ……」

そして息苦しこ。

叫ぶともつと苦しこのこ、体が変わる感触に声を上げずにはいられない。

全てが変わると同時に息苦しきガリンを襲つた。

「はつあ、は、は…あ、つは、は」

つかへ呼吸ができない。

「どうだ氣分は？しかし綺麗だなお前。殺してしまつのがもつたにないくらいだ」

そつ面つりコンの髪を撫でる。

気持ち悪い。

「や…や…こで」

「ん？聞こえないな」

「さわ…ないで」

流れる涙は止まるこじとを知らないようだ。

男が耳元で囁く

「今から地獄を味合わせてやるよ」

その囁きはまるで魔王の囁き。

救出される体

「た……けて、う……る」

その声は『風かない』。

「驚いた。この短い期間でよくこれほどこの世界に馴染んだな」

私の肌につめを立てるコンドグレン。

地面に転がされているだけで、自分の体重が掛かった体は痛い。
そこにつめを立てるとその痛さはまるで刃物を突きつけられてい
るよう。

「あ、あ、つー」

「まあ、そりは言つても通常の何倍も痛いはずだ。蹴つたりしたら
内臓破裂の痛みなんじゃねえか？」

田隠しをされているため、いつどこに痛みがやつてくるかわからな
い。

その上、リンググレンに氣絶しない魔法をかけられたよつだった。
意識が一瞬飛ぶが、本当に一瞬で、次の瞬間には戻される。

「ううう… る… つー」

ただひたすらウイルに助けを求める。

「はう、王に助けを求めても無駄だ。王は今頃俺の仲間と遊んでる。
もしかしたら自分の運命人が消えたことにも気づいてないんじゃね
えか？」

「ううう… る… つー」

わかっている。

だが体が動かず、声しか出せないリンにはウイルに助けを求めるし
かなかつた。

「往生際が悪いねえ」

「きやあああああああ… る… つー」

きつと肌を強く抓られたのだろう。

だが、今のリンにはそれは肉を引き剥がされるに相当する。

「ふーん、体の方は粗方馴染んでんだ。体はなんともないけど神経
がまだなんだな。普通は抓つたら皮膚が取れちゃうんだがねえ。ま
あ、その分痛めつけられるのが止まらないってことだな。分かるか
？ 体は無事だが精神がズタズタになるつちゅう最悪のパターンさ」

楽しそうにこうこんドグレーーン。

「あ、う、は… あ… やつ… うう… る… つー ウイルつー」

あいつたけの声で叫ぶ。

「つ、何だ…！」

リンググレーンが少し焦っているようだが、田舎しをされているためわからない。

瞬間、体が浮遊感に襲われる。

「リン…」

「つ、あ、」

ウイルの声が耳たぶを打つ。

だが、ウイルに締め付けられ、体は悲鳴をあげる。

「またまた驚いたな。まさか王を召喚するとはな」

リンググレーンの声が少し離れた場所から聞こえた。

「リンググレーン…」

ウイルの地を這いつゝ声に体が震える。

「分が悪いな。今日せいで退散をせりあつたが」

そして、リンググレーンの気配が無くなる。

それと同時に田嶋しをはすされ、ウイルの顔が見えた。

「コン…、リン…」

「う…ぬ…痛つ…はな…て」

ウイルに抱きすぐめられてる体が悲鳴をあげる。

「ウイル、痛がつて。離せ。そしてそこをビヂナ」

ふと他者の女性の声が聞こえ、そこに田嶋を向けると、ルシアが軍服に身を包み立っていた。

ウイルは渋々とこの感じでリンを離し、全裸のリンに上着をかけ、宙に浮かせた。

「どこにも触れていらない体は先程よりも痛みは無かつたが、息苦しさは残った。

「リン、すまない」

ウイルが壊れ物に触れるような手つきでリンの頬を撫でた。

その手に助かつたんだと安心した。

救出された体（後書き）

後で修正しますとも。

奪われた半身

全てを奪われた気がして目の前が真っ白になった。

「ウィル、クラークがリンググレーンと繋がっていたらしい。今私の部隊が応戦している」

突然のルシアからの報告。

ルシアは、女で王族であるが、国的第一騎士団団長でもある。

既に先代の王と王妃達は戦いに参加しているだろ？

「俺も応戦する」

そう言って部屋を出た。

「つー? リン！」

突然、リンにつけた首輪が城の敷地の外に出るのを感じた。
そして居場所が掴めなくなつた。

「ルシア、リンが攫われた可能性がある」

そう言つと、ルシアは敵と応戦しながらじみを見た。

声は冷静だが、内心凄く焦つていた。

「そりか…。嵌められたな。さつわと片付けよつ」

ルシアはより一層魔法を強く大きくした。

「どうだ…」

粗方片付けたところで、リンを探す。

「まだだ…。どうだ、リン」

必死で首輪の気配を探すが、妨害工作をされているらしく中々掴めない。

〈ウイルフ！〉

リンの声にハッとした瞬間、自分の下に魔方陣が現れた。

「ウイル！」

「コンだ！」

すぐさま魔方陣を止めようとしたルシアにそつ叫ぶと、ルシアも魔方陣の上に乗った。

瞬間景色が変わり、足元に横たわった女の姿が田に入った。

すぐ近くにリンだとわかった。

「コン……」

横抱きにして、抱きしめる。

「う、あ、」

リンが苦悶の声を上げた。

無理やり元の姿に戻されたのだろうコンの体は今、少しの衝撃で大変な痛みを伴うだろ？

それがわかっていても離すことはできなかつた。

「またまた驚いたな。まさか王を召喚するとはな」

少し離れた場所に退避しているコンドグレーンの姿が田に映つた。

「コンドグレーン……」

怒りが湧き上がりてきて、声が低くなる。

「分が悪いな。今日はここで退散をせてもうおつか

リンググレーンがどこかに転移したらしく。

だが、それを追いつめはない。

今はリンが先である。

田嶌しをはずすと、この世界に来たときに変わったであろう虚ろな金色の瞳が見えた。

「コン…、コン…」

「う…ぬ…痛つ…はな…て」

抱きすべめると、リンは痛そうに身を揺る。

「ウイ^ル、痛がつて^る。離せ。そしてそこを離せ!」

ルシアから声がかかり、ハツと我に返つて裸のリンに上着をかけて宙に浮かせた。

すると、リンは痛みを感じなくなつたのか、歪めていた顔を少し穏やかにするが、息苦しそうにしていた。

「リン、すまない」

いつもなつたのも全て自分のせいである。

クラークの策にまんまと嵌められたのだ。

リンの頬を震えた手で撫でると、リンは意識を手放した。

青白い肌を見てもつまでも覚めやしないのではないかと思つてしまつた。

奪われた半身（後書き）

ウィル視点でした

差し込んだ光

まだ目を覚まさないのか…？

「ウィル、そろそろ」

ルシアがウィルに仕事の催促をする。

あの事件以来、ウィルはリンの傍を離れようとしなかった。

リンは体こそ何ともないが、精神はボロボロだった。
あれから一向に目が覚める気配は無い。

「頼むから仕事をしてくれウィル。お前に仕事をさせなければ、私は研究に取り掛かれない。リンが目覚めが遅くなるだけだ」

ルシアは魔術の優秀な研究者もある。

今回は、リンが早くこの世界に馴染ませる魔方陣の研究をしている。
無理やり変換させられたリンの体を再び動物に変えるのは、リンの体がもたないと判断されたからだ。

ウィルは無言で机に向う。

リンは常にウィルの近くにいる。

魔法で宙に浮かされ、何にも触れぬようにされている。

「…見込みはあるか？」

「…………わからない。こんなこと初めてだ。リンググレーンがあんな無茶なことをして、尚且つそれに耐え切れた運命人なんて過去にいなからな」

ルシアはそれだけ言つと、部屋を去つた。

後に残つたウィルは、顔を手で覆つた。

「リン…」

「…お母様」

ルシアの研究室にはサラがいた。

「私も手伝うわ。ルウちゃん一人で大変でしょ？ウイリアムの許可を取つてきたの。何よりリンちゃんのためだから」

サラは見かけによらず、とても頭がいい。

ルシアの頭の良さはサラから受け継いだものだ。

「ルウちゃん、これ見て」

サラが手にしているのは古びた本。

「これは…、運命人の召喚の儀が始まった時の…。【異世界からの運命人との世界】…」

本を開いてみる。

「つ、お母様…この魔方陣、まだ途中ですが、これなり…」

「ええ、リンちゃんをこの世界に馴染ませることができるかもしない」

それは24代目の王および、初代魔術師の資料だった。

先の見えない闇に光が差しこんだ。

「ウイール君！ できたわ！」

バーンという音と共に部屋に入ってきたサラ。その後ろにはルシア。

「この魔方陣を使えば異世界から来た運命人をすぐにこの世界に馴染ませることができる」

「すぐに準備する」

ウィルは、すぐさま立ち上がり、部屋を出て行つた。

初めてリンがこの世界に召喚されたときの部屋には、リンを早急にこの世界に馴染ませるための魔方陣が描かれている。その魔方陣の上には、リンが青白い顔で横たわっていた。

「始める」

ウイルがそう言つと、魔方陣が光りだした。そのまま光がリンの体に入つていき、最後にはリンの下の魔方陣は消えていた。

「リン…」

ウイルが近づくと、先ほどまで青白く、浅い呼吸を繰り返していたリンの頬に赤みが差し、呼吸も穏やかになつていた。

「まだ意識が戻るまで油断できないが、ひとまず安心だらう…」

ルシアの言葉に、ウイルはリンを抱きしめた。

リンが穏やかに呼吸しているのを見て、自分の中の波も穏やかになつた気がした。

差し込んだ光（後書き）

次回、リンちゃんが目覚ます！

奪われた唇

ふわふわとした意識がゆっくつとはつせつしてこそ、目を開けた。

「リン……」

目を開けたそこにはウイルが心配そうに私の顔を覗き込んでいました。

「うー……る？」

舌がうまくまわつません。意識もしつかりしません。体も動かしづらいです。

「ビ……して……」

ここに寝ているのだからと、一番最後の記憶を掘り起します。

「あ……」

リンググレーに攫われた事と、強烈な痛みと疲れを思い出す。

体が震える。

今まであんなに痛い体験はしたことがない。

震える体をそっとウイルが包んでくれる。

「気分はどうだ？」

ウイルの後ろからルシアの声が聞こえた。

「あ…、特に…。体が…動かしにくい…です」

「それでもまだマシな方だ。これからしばらく私が経過観察と体調管理をさせてもらおう。何か変化があったら私に伝える」「ひえろ

ルシアはそれだけ言いつと部屋を出て行った。

「ウイル…。助けてくれて…ありがとう

「…俺はお礼を言われる筋合いはない。俺はリンに謝らなければならぬ。クラークの策にまんまと嵌められて、リンに辛い思いをさせた」

ウイルは私が寝ている間に随分と変わったようだ。
前よりしゃべるようになつた。

「ウイルの…せいじや…ない。私が…もっと…つ…？」

その先はウイルの唇のせいで言えなかつた。

「それでも俺のせいだ。リンを守れなかつた

ウイルはリンを包んでいる腕を一層強くした。

「コン…」

「コン…」

それからウイルに口付けの嵐でほとんど会話といつ会話をしなかつたが、リンの不安を取り除くには十分すぎるほどだった。

いつの間にか眠っていたらしい。
外はまだ夜更けと言う感じだった。

あれから私から全く離れなくなり、過保護と化したウイルは一緒に
眠っている。

そつとベッドから抜け出し、鏡の前に立つ。

「本当に…戻ったんだ…」

そこには長い黒髪で金色の瞳の少女の姿。

瞳はこの世界に来たことで、黒から金に変わった。

「コン…」

ベットからウイルの声が聞こえてベッドのまつを見ると、ウイルが上半身を起こしてこちらを見ていた。

「起いしあひつた？」

ベッドに這はり腰掛かる。

「あやつ…」

そのまま腕を引かれてキスされる。

「俺から離れるな」

腰を引か寄せられ、抱きしめられる。

「ウィルつ…、近つ…」

今度は深い口付け。

「ん……ふつ…はあ」

「寝」

静かな声で言われ、頭を撫でられると眠気が襲ってきた。
眠気に逆らわず意識を落とす。

また唇にウィルの唇を感じた。

あ、ファーストキスをうつと奪われた。

奪われた唇（後書き）

チューしそれじゃね？

魔法の学園…ですか？

「リン、調子はどうだ」

アーラーを連れて城内を散歩していると、ルシアに会った。ルシアは白衣に似た白い服を着ている。この世界での白衣のようなものらしい。

「大分調子はいいよ」

あれから2週間経ち、体調も幾分回復した。

「でも、たまにプツンと意識が途切れてしまふことがたまにありますね」

「この世界に体が馴染むには睡眠が一番手っ取り早い。眠気に襲われたときは身を任せなさい」

ルシアは人見知りなだけで、根は優しい。

ウイリアムの、否、フォンテーンの近づきがたいオーラを出しているところを濃く受け継いでいるだけなのだ。

「しかし、入浴の際に寝てしまわた時はとても驚きましたわ」

アーラーナが苦笑しながら言つ。

実はこの間、お風呂に浸かっている最中に眠気に襲われ、眠つてしまつたがために溺れてしまいそうになるといつ事件が起つた。

「それは…危険だな。ならばウィルと共に入ればいいではないか」

ルシアが眞面目な顔で言つ。

「な、ななな、る、ルシア！？」

顔を真っ赤にして驚く。

「まさか…、まだ…」

「ああああああああ…！…ちよ、ちよちよちよ、ちよつと部屋で一緒にお茶しない！？」

リンはルシアを引つ張り、強引に部屋に連れ込んだ。

「ほう、あのウイルがな…。まあ、今はまだリンの体がこの世界に馴染みきつてないから夜あまり励むのはお勧めしない

「い、いや、だから！なんでルシアはやつらのことを眞顔で言つての！？」

ていうかあのウィルってなにさー

「大事にされているってことに変わりはないからいいのではないか？」

ルシアの言葉に頬を染める。

「それに、これからは少しづつ魔法の勉強をしなければならないから今はこの世界に馴染むことを優先するよ！」

「魔法の勉強！？」

「？聞いてないのか？魔力をウィルと共有しているんだ。自分の身を守る魔力はある。それどころか、この国吹っ飛ばしてもまだ残るくらいの魔力をウィルは持っている」

国吹っ飛ばすですって！？

最強かつ！？

「その力を有効に自己防衛に生かすために魔法を学ぶ義務が王妃にある。要するに早くウィルを安心させろってことだ」

ウィルはあの事件以来、より強い防御魔法と探査魔法をかけている。その魔力の減りは魔力を共有しているリンにもわかる。その上、魔法をかけているウィルには負担がかかるのだ。

魔力は共有しているが、使う方にしか負担が掛からないらしく、リンクにはどれ程ウィルが疲れているかわからないのだ。

「まあ、ウイルは体力があるから、リンにいくら強い魔術を施しても微塵も疲れないだろうがな」

「えっ！？ そうなの？」

「私が言っているのは気疲れのほうだ。お前はチョロチョロと城を動き回るからな。まるで昔の…こや、今もそつか、…お母様のようだ」

サラちゃんには悪いが、あんなに動いてウイルを困らしているつもりはない。

「まあ、あの学園は私もウイルも通った学校だ。警備は万全だし、教授も王族の関係者で心配は何一つ無い。唯一心配があるとしたら、ウイルが素直にリンを学園に通わせるかだがな」

「が、学園ーー？」

てっきり家庭教師みたいな人が来て、教えるのかと思つていた。

「ああ、あそこは身分関係無しに教えるから、リンは普通に友達もできると思う。私もウイルも王族ということを隠して通つたからな。まあ、別にばれたらどうにかなるつて訳ではないから、本当に危なくなつたら正体を明かせ」

あ、危なくなつたらつて…なにがあるのでしょうか…。

「まあ、通うのは次の召喚の儀の後だから少しつ少し後だな。異世界からきた者は少数だが、二ヶ月で一学年だから、それなりに人数はいる。変な奴も多いから気をつけろ。たまに戦場から召喚されてき

た奴とかこるから

わー、不安要素いつぱいだわあ。

魔法学園（後書き）

リンちゃんがこんなにしゃべるの久しぶりw

朝、起きたらウイルの膝の上でした。
これはもう慣れっこなのです。

ウイルが執務に私を連れて行くようになつてから、朝早く起きれない私はアーラーに寝たまま着替えさせられ、起きたらウイルの膝の上という生活をほぼ毎日送っています。

先日召喚の儀も終わり、それに参加していたウルフの運命人のクリステイーナが家族に加わりました。

召喚の儀が終わつたことで、これから世間は例の魔法学園の入学シーズンとなりまして……。

「リン……」

「んっ……」

いつでもどこでも会えないと寂しげるウイルが、引つ付いて離れないのだった。

「もうー！ウイル！いい加減に……」

いつも無表情なウイルが眉を下げている……だとつ！？

顔を真っ赤にして固まるリンをこじわざとばかりにキスしまくるという行動がもう一週間続いている。

その後、執事のシルフの声でやっと開放されたのだった。

リンがこれから通う魔法学校は、フォンテーンだけでなく、各国からも生徒が集まる。身分制度は通学の間だけ取り消され、身分差別をすることは校則で禁止されている。

今回の入学式では襲撃防止のため覆面をしているが、フォンテーン王国、カーライル王国、アロイス王国、レヴァイン王国、リウォール王国の五大王国の国王が出席している。

入学式は三ヶ月に一回あり、三ヶ月で一学年である。

「あ

睡魔に襲われ舟を漕いでいると、膝に置いていたプログラムが隣の女の子の下に落ちた。

「はい」

にこりと笑つてプログラムを渡してくれた女の子は超絶美人だった。

「あ、ありがとう」

「いいえ、あの、私ずっとお話を伺っていたのです。お友達になりたくて…」

「えー本当に嬉しい！私リン・シノミヤ。コンでこことよ

「私はアイリーン・ローカーと申します」

いかにもお嬢様という感じのアイリーンは、ゆるいカーブの金髪の容姿端麗で女のリンも見惚れる美女だった。異世界から召喚された運命人で、三ヶ月前にこの世界にやってきたのだそうだ。

その後も、アイリーンと色々と話していくといつの中にか入学式が終わり、その場解散のため式場前でアイリーンと別れた。

「初日はどうだった？」

夜、寝る前にアラーナの淹れた紅茶を飲みながら今日のことを報告する。

「友達ができたのー！アイリーンっていつ子なんだ！」

まるで子供のようにはしゃぐコンに対し、ウイルはムスッとしている。

「ああ、知ってる」

知ってるのに聞いたんかい！
とこうかストーカー！？

「アラーナ、今日はもう休みでいい

そう言つ Kylie に、アラーナはクスリと笑い、礼をして部屋を出て行つた。

「あ、あの、う…っん…は…あ…ふ…」

深い口付けのあと、ベッドに横抱きで強制連行される。

「リンとの時間が減るのは辛いな…」

意識が朦朧としている中、耳元で囁かれ、リンは爆発寸前である。

「ウイル…」

「何もしない…。」のまま寝かせられる…

リンを抱き枕状態にしたまま、ウイルは寝息をたてはじめる。

「ビ、ビ…う…う…寝れない…」

その後、ビキニして眠れそうにならないリンは、ちづじめた変換の副作用の睡気によって運良く寝付くことができたのだった。

甘いぜ！

不思議な出会い

リンが入った異世界クラスは、10人のクラスであった。

「あんまり人がいないです」

アイリーンが周りを見渡しながら言つ。

教室の机に一人ずつぽつぽつと座つている。

固まつて座つているのはリンとアイリーンだけだ。

「あ、教授？」

薄めの本を持つて教室に入ってきた青い髪の男。

この世界の人は老いないため、生徒と教師の区別がつかない。

「俺はこのクラスの担当教授のランバート・ハーシュルだ。お前らにはまず基礎から防御魔法から学んでもらう。この世界は異世界人にとって危ないことが多いからな」

その言葉で、リンの頭にリンドグレーンのことが浮かんだ。

「ある程度この世界について運命人に聞いているだろ。今日は、もう少し詳しくこの世界について学んでもらう。まずはこの世界での身分制度について」

先生の下から球体が浮かんできて、三角に変形した。
まるで食物連鎖の図みたいた。

「下から平民、貴族、王族となつてゐる。この世界は、主に五大王国から成つてゐるが、どの国にも奴隸はない。今から5万3000年ほど前に廃止された。異世界人の身分は、相方の身分と統一される」

「そういうえばリンさん、この学年、フォンテーンの王族の運命人も通つてゐるんだそうです。この学園では身分を明かすことが極端に少ないですから、どこで王族の方と接触してゐるかわからないうつてことですよね。今まで無礼を働いていないといいのですが…」

すみません、アイリーンさん。
その人あなたの隣にいたりします。
というか無礼なんて滅相も無い！

「次に、魔法についてだ。元の世界で魔法がなかつた者もいるだろうが、相方に魔力があれば魔法は使える。あとは魔獸。本来、召喚獸として扱われることもあるが、野生の魔獸はなんでも食つから氣をつけ」

え！？魔獸なんて一度もあつたことがないんですけど…

「魔獸を恐れるな。異世界人は大抵召喚獸を持つ。この学園でも持つてもらうことになつてゐる。恐れていたらいつまでたつても召喚獸が見つからない。まあ、召喚獸と言つても色々ある。ある奴は人間を召喚獸としていたからな。要するに生きているならばなんでも召喚獸になれる。召喚獸というのは名だけだ」

この学園では召喚獸は強制なのか…。
どうせなら愛着が湧くような姿がいい。

リンは気持ち悪い魔獣を想像し、顔をしかめた。

「お前たちは、反異世界団体から身を守らなくてはならない。反異世界団体は、大体が異世界人によつて害をもたらされたやつらが集まつてゐる。捕まつたら生きて帰つてこれる確立は絶望的だ」

クラスには緊張の糸が張り詰め、リンは鳥肌が立つた。

リンググレーーンは正直トラウマで、名前も聞きたくない。

「…空気が暗くなつたな。授業初日は二ヶ月まで。課題を出さう。一ヶ月以内に召喚獣を見つける」と

そう言つてランバートは教室を出て行つた。

「ここで召喚獣を探してんのだよね…」

ウィルの城に戻り、執務中のウィルに相談する。

「…………そのうちいい奴が見つかるだろ?」

ウィルにしては投げやりである。

「…気長に待つか…」

そう言つて田を開じた。

「ん？」

暇すぎたので、只今中庭を散歩中です。

「ひーひー、なー。」

普段お皿にさる「ひはま」ない獸と出合いました。

「豹ー？」

しかも黒いです。

じつといちらを見ており、だんだん近づいてきます。
だれかヘルプ！食われるー！

とつといらの前まで来て、食べられる痛みに覚悟してみると、足こ
なにかわわわわと感触が。

「ひー。」

なんと黒豹が足に擦り寄つてくるではあつませんかー！
こつやつて見るとなんか…。

「かわいい…」

あるといつも見ゆる黒豹。

瞳は青く、まるで…。

「ウイルみたい…」

それは中庭での不思議な出会いでした。

不思議な出会い（後書き）

夜遅くなつて申し訳ないです！

黒豹をさと契約しちゃ

何このかわいい動物！

すつすり、わわさわ。

立っている私の手に無理やり頭を押し付けてなでなでさせた黒豹。触れる毛並みはさりげない。

「君、どこから来たの？」

しゃがんで田線を合わせながら聞く。

「ひやつー。」

寄られて顔をなめられる。

随分と懐いてくれていいよつだ。

「あ、召喚獣」

無理やり撫でせしりながら召喚獣のことを思って出す。
果たしてこの黒豹は魔獸なのだろうか…？

「君は魔獸ですか？」

答えが帰つてくるわけ無いが、聞いてみる。

「…

手にまた擦り寄つてくれる。

これは魔獸であると受け取つていいのだらうか？

疑つてゐると、黒豹が少し離れ、足の下に魔方陣を出した。

「うおー！」

その魔方陣から噴水のように水が飛び出る。

「…………す、いね、君」

この黒豹が召喚獣なら、ウイルも心配いらないだらう。もつとも、私の召喚獣に関しては珍しく全くもつて興味が無いようだったが。

「あの…、えつと…、私の召喚獣になつてくれませんか…？」

立ち上がつて手を差し伸べる。

さわつ。

「…」

その手に擦り寄つてくる黒豹。

これはYESととってもいいんだよね。いいよね！？

「ありがとうっ！」

黒豹の首にぎゅっと抱きつぐ。
もひ、恐怖なんかない。

……ここからどうすればいいんだろう…。

「えー？」

困っていると、下に魔方陣が現れる。

魔方陣から発せられる光りに包まれ、前が見えなくなつた後、数秒
後に視界が戻つた。

「……なに？……あれ？」

その黒豹の首には銀で作られたチョーカーのようなものがあつた。
自分の首にも触れてみると、何かある感触がある。

「……契約完了？」

そう言つと、再び顔をなめられた。

「でね、その召喚獣が黒豹なんだけど、毛並みがさらさらですっご
く綺麗なのー！」

夜、アラーナに召喚獣について報告する。

「そうですか。早く召喚獣が見つかってアラーナは安心です」

「コラと微笑むアラーナ。

向かいに座っているウィルは無反応。だが、ちょっと機嫌がいい。

「ウィル、なんか良いことでもあった?」

「ああ」

ウィルが少し微笑んだように見えた。

「アラーナ、今日はもういい

「はい」

アラーナは部屋を出て行く。

それと同時にウィルに抱えられ、ベットに降ろされる。
そしてチョーカーをはずされた。

取り外し可能なんだ…。

「あ、ウィルにも今度会わせて上げるね

「…それは無理だ」

「何で？」

「…………いい加減寝ろ」

腰を引き寄せられ、耳元で囁かれ、キスされた。

顔が真っ赤なのが自分でもわかる。

未だにウイルの免疫がついていない。

寝ないとひたすらキスの嵐が降ってくる」とは今まで十分学習済みだ。

「お、おやすみー」

そつまつて皿を開じ、ウイルの温もりにすぐさま意識を手放した。

あれ?なんかまぐらかされた気が…。

魔力を使つと疲れるのです

今日は何故か教室が暗かつた。

「今日は魔力を注ぐ練習をやる」

そう言つランバートの手には小さなビー玉のような透明な玉。

「これに魔力を注ぐと光る。これは一般的に暗闇を照らす光として使われている。最も簡単に使える魔具だ」

先生が数個の玉をリン達の目の前に浮かばせる。

「最初は手に持つてやってみる」

玉を手に持つてみる。

「んー、光らない…」

アイリーンも難しい顔をしている。

「私も光りません。どうやって魔力を込めればいいのか…」

「自分の魔力の泉から引き出せ。イメージするだけでいい。そのままで玉に意識を持つていくだけでいい」

リンは、自分の奥深くにある、大きな泉を少し前から感じていた。ウイルが魔法をうたびに減っていくことから、それが魔力の泉に違いない。

「…………つー」

目を閉じ、魔力を少しづつ吸い出すイメージをすると少し魔力が引き出せた。

そのまま手の中の玉に持つていくイメージをすると、玉に魔力が流れ込んでいくのがわかつた。

「リンさん凄い！光つてます！」

目を開けると弱い光だが、玉が光つている。

「もう少し魔力を増やしてもいい。これくらい」

ランバートの手の上に浮かんでいる玉が部屋を照らす。

それを見て、少しずつ魔力の量を増やしていく。

「そうだ。そのまま」

ランバートと同じくらい強い光になる。

「あ、私も光りました！」

隣のアイリーンも、リンほどではないが玉が光った。

「いいが、魔力は使っていながら自由自在になるだらう。経験が必要なものだ。魔力を好きなように出せるようにならないと、魔方陣も使えやしない。それどころか、魔具を使えない。魔具はお前たちにとって一番最初に使う防御となる。家にある魔具でいい。練習

して、自由自在に操れるようになる」ことが今回の課題だ

そつまつトランパートは教室を出て行った。

「ウイル、魔具無い？」

ウイルの執務室に行くと、シルフが待つてましたと言わんばかりにこちらに寄ってきて、リンに一冊の本を渡した。

「そこにはあらかじめ魔方陣が書いてある。それに魔力を流し込む

ウイルは書類を見たまま言った。

「そこに座つて練習している。もうすぐ終わる」

ウイルに言われた通り、ソファーに座つて本を開いてみる。

この世界の文字は大体頭の中で変換されるため、本を読むことは造作も無い。

「↙緋玉の魔方陣↘……」

とつあえず、魔力をな流しこんでみる。

「……」

一瞬魔方陣が光つたが、すぐに消えてしまった。

「何で……」

「魔方陣に均等に魔力を注ぐのです。一定の魔力を保ちながら魔方陣の隅々まで平らになるように流すイメージで」

シルフがコツを教えてくれる。

「……っあ

先ほどよりも光った時間は長かったが、またすぐに消えてしまう。

「はあ……」

練習あるのみ！と着合いをいれて再び挑戦にかかりた。

「リン、そろそろ」

「も……ちよ……」

不思議と眠気が襲つてくる。

これはいつもの副作用ではない。

「だが、初めて魔力を使つんだ。そろそろ疲れているはずだ」

「だつて…、ま…だ

最初より魔方陣が光るようになり、魔方陣から緋色の光の玉が出てきた。だが、それも少しの間だけだった。

「……」

「…つわー」

気がついたらベットの上だった。
じつは、ウイルが転移したらしく。

「やつすよくな。あまり頑張るな。俺が退屈だ

耳元で囁かれ、深いキスをされる。

「…つんー…う…つはあ…つ

息が苦しくなってきた頃、ウイルがそっと名残惜しそうに口を開けた。

「…………頼むから無茶はしないでくれ。あまり無茶をすると体を壊す…」

もう一度チュッチとフレンチキスされ、まぶたの上に手を置かれる。

「寝る、明日副作用で一日中寝ることになつたら、俺が堪える」

何でウイルが堪えるのだろう…?と想しながらも、先ほどから襲いつ

てぐる眠氣には勝てなかつた。

リンの声を聞いて笑顔を見ないと嘗つよつたのない喪失感に襲われる

。 。

魔力を使つと疲れるのです（後書き）

なんかチューで終わるの多い気が…

ウィルの生誕祭

「アラーナ、何かあるの？」

今日は城も町も随分と騒がしい。

「はい。ウィルフレッド様の誕生日が5日後に迫つてこることもあり、本日より学園は休校、5日かけての祭りがあるのです」

「ウィルの誕生日！？」

「ウィル、城下に買い物に出たいんだけど……。いい？」

「…何か欲しい物があるのなら言え」

「自分で見て買いたいの！」

「……付いて「ダメー！アラーナとサラさんとルシ亞と女の子同士の買い物がしたいの！」…はあ、わかった」

誕生日など、全くもつて口にしなかつたウィルのせいでプレゼントを買い損ねるところだつたリンは、城下でプレゼントを探そうと考えていた。

何かあつたらビックリするんだと言われると何も言えないの、ルシア

に付いてきてもうことにしたのだ。

そうしたら、傍にいたサラさんも一緒に行くと言い出し、結局4人で一緒にプレゼントを買いに行くことになったのだった。

「ありがとうございます、ウイル。じゃあ行つて来ますー。」

そう言ひ部屋を飛び出した。

城下はとても賑やかだった。

「せういえば、リンちゃんは初めての城下よね？」

言われてみればそうである。

城から出たのは学園に行くときだけで、その登校でさえもウイルとの転移魔法であるから、ほとんど外に出たことはない。

「あまりうらちゅうするな。祭りに乗じて危ない輩も潜んでいる

まあ、これだけの人がいれば、潜むことも簡単だらう。

「お嬢さん達、おーついかが？」

帽子を被った男が、きれいな花を取り出す。

「魔力を込めるだけでこの花がどんな花の種であろうと作ってくれます」

「す、」いのね！」「へへへ。」

「一輪850イティです」

「なら、4輪ぐださいな」

サラさんはやつやく目的から脱線していた。

「はあ、お母様、早く買い物をすまないとけないのです。ウイルから『やられた時間は口が高く登りきるまでなのですから』

そう言って、ルシアがサラさんを連れてくる。

「せうだつた！コンちゃんは何かあげるもの決まつてね。」

「いいえ。見て決めようと思つて」

「それなら普段身に付けられる物にしたらいしわ。どうせなら、ペアにしたらどう？·きっとウイル君喜ぶわ」

サラさんの助言に従い、アクセサリーを買つことに決めた。

「どれがいいかな…」

「やつですね、腕輪は執務の邪魔になつてしまひますし、ネックレスはリン様がチヨーカーをされてますから…」

「どうせなら付けているのが分かるものがいいわよね

「あ、これ

止まつたのはウイルの瞳と同じ色をした青いピアス。

「それはこひらのピアスと対になつてるのでござります。一品物で、王のマリンブルーの瞳と同じ色でつくれられ、対のピアスは、王妃が月のような透き通つた瞳をしてゐるといひ詮ばかりおられたものです」

眸、瞳の色は青と金だが、それぞれ個性があり、濃淡や色が少しづつ違つてゐる。

ウイルは透き通つたマリンブルーだが、父のウイリアムはダークブルーの瞳である。

「私これにします」

アラーナに会計を頼む。

「よかつたわね、リンちゃん」

サラさんは二つと笑い、次行くわよーと書つてリンの手を引いた。

「ほしい物は買えたか？」

夜、ベットの中でウイルが聞いてくる。

「うん」

「何を買ったんだ？」

普段あまり物をねだらないリンが、わがままを言つてわざわざ城下に買いに行つたものが気になつてしまふらしい。

「内緒。そのうちわかるよ」

まだ舞い上がる心が落ち着かない。

そう語りて今田は自分からキスをした。

「つー、リン、あまり俺を煽るな！」

今度はウイルにキスされる。

「...愛しつる」

5日後、ウイルはどうな顔をしてピアスを受け取ってくれるだろうか…？

五大王国の王

あつと言つ間に5日経ち、今日は城で貴族を招いてのパーティーがある。

それは、私の初お披露目会でもあった。

「リン様もウイルフレッド様もお顔を隠してもうつことになつております」

水色のドレス、召喚獣のチョーカー、頭には顔の隠れるベールを身に付ける。

「こつウイルフレッド様にプレゼントを？」

「パーティーが終わつてから、一人になつたとき…」

頬を染めて言つ conson に、アラーナはクスリと笑つた。

「きつとウイルフレッド様に喜んでいただけますわ」

アラーナがドレスの裾を整えながら言つた。

「うふ。 そつだと嬉しいな

ウイルの喜ぶ顔を浮かべて微笑した。

ウイルと会流する部屋に向うと、そこには既にウイルが座っていた。

「…フ…綺麗…だ」

ウイルはやうやくこちらに歩いてきて、リンの顔を懸すベールを上げ、キスをする。

「行くか」

「うそ」

そう言つて会場に向つた。

ウイルのエスコートで会場に入ると、ざわついていた会場がシンと静まり返る。

「今日は我が生誕パーティーにお越しいただき、誠に嬉しく思ひ。このパーティーを機に、我が運命人を紹介しようと思つ」

ウイルがそう言つと、リンと一緒に一斉に視線が集まる。

「コン・シノミヤですか」

それだけ言つて後ろに下がる。

ウイルには名前を言つたら下がれと言われていた。

「皆、パーティーを楽しんでくれ」

「ウィルがそう言つと、皆一斉に会話を再会し、元のざわつきが戻つた。

「今日は他国の王と王妃も来ている。挨拶回りに行かないと行かなければならぬが、大丈夫か？」

パーティーに慣れていないリンを気遣つてくれての言葉だった。

「大丈夫。いつかはこういうことに慣れないといけないし、何事も経験だから」

ウィルの手に自分の手を重ね、人の群れの中に入つていった。

「やあ、ウィルフレッド。連れの入学式以来だな」

濃い紫色の髪の、覆面をした男の人があれに話しかけてきた。

「シリル、来てくれたのか」

二人とも握手を交わす。

「初めてまして、私はシリル・レヴァイン。レヴァイン王国の王だ。隣は私の運命人のアイリーンだ」

「アイリーンー!？」

「もしかして……リンさん?」

シリルさんの隣に金髪の美女がいるな、とは思ったが、まさかアイリーンだとは……。

「なんだ、友達だったのかアイリーン」

「はい」

まさかこんなところでよく知った友達と会うことにならうとは思わなかつた。

「リンがいつも世話をなつてている。俺はウィルフレッドだ」

「初めまして。アイリーンです。」（ちゅうじんじんせん）お世話になつております

「こんなところにいたのが、ウィルフレッド、シリル」

三人の男の人がこちらに向つてくる。

リンたちから周りが遠ざかつて行つた。

「初めまして、リンさん、アイリーンさん。私はバルド・カーライル。カーライル王国の王です」

バルドさんは水色の髪で、いかにも優男。

「俺はファウスト・アロイス。アロイス王国の王だ。」

右目に傷があつて、ヤのつく怖い人っぽいファウストさん。

「俺はマルク・リウォール！リウォール王国の王。よろしくな

熱血と言つ感じのマルクさん。

「リンです」

「アイリーンです」

一人で挨拶をする。

「リンさん、アイリーン。一人で食事を楽しんでおいで」

正直、この五大王国の王たちの存在感に圧倒されていたため、シリルさんの言葉に従つた。

「リン、パーティーが終わつたら話がある」

離れ際にウィルがそう耳打ちした。

五大王国の王（後書き）

今回ラブ少なつ！

次回ラブラブさせます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8973w/>

王様に召喚されました

2011年10月9日19時31分発行